

平成 21 年度学生生活実態調査報告書

首都大学東京 学生委員会

平成 22 年 2 月

目次

1	学生生活の基礎情報.....	4
2	学生食堂への評価と要望.....	13
3	キャンパス移動に伴う環境の変化.....	17
4	大学ホームページの利用状況.....	18

学生生活実態調査は、学生の生活実態を把握し福利厚生面での改善を図るために首都大学東京学生委員会が企画実施している調査である。調査概要は以下のとおりである。

調査概要

【調査実施計画】

調査方法は過去の調査と同じく対象者を無作為に抽出して郵送法で実施した。平成 21 年 10 月 1 日現在で首都大学東京に在籍する学部生及び大学院生合計 8718 人（休学者を除く）から 1 / 3 の確率で 2906 人を抽出した。調査票は平成 21 年 10 月 1 日に郵送し、提出期限を平成 21 年 10 月 31 日として各部局窓口及び直接郵送によって回収した。回収の最終締め切りは平成 21 年 11 月 5 日であった。なお、本年度から東京都立大学、都立科学技術大学、都立保健科学大学の各大学に所属する学生は対象者から除外することとした。

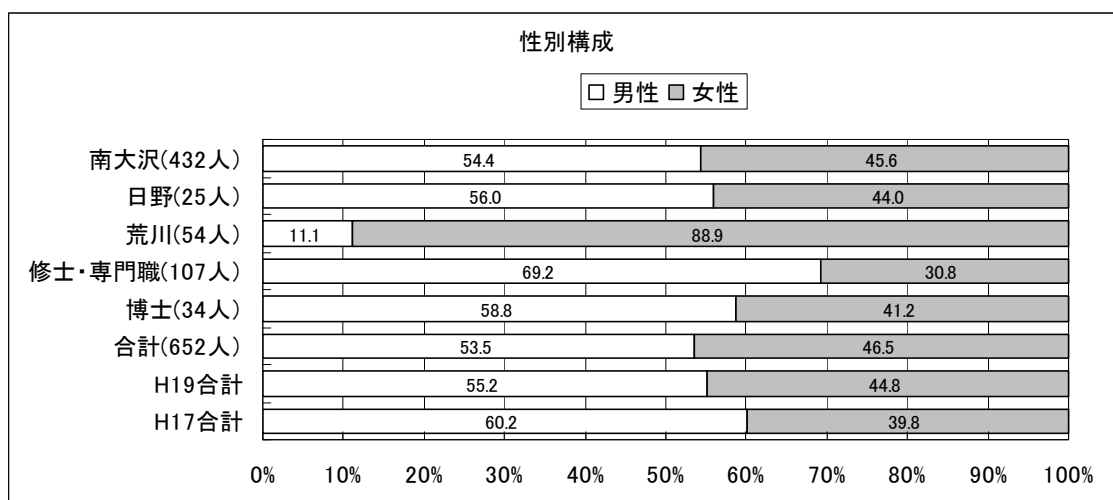
【回収結果】

回収数は 652 人（回収率 22.4%）であり、前回の平成 19 年度調査の回収数 620 人（回収率 21.8%）と比べて実数、回収率とも上回った。

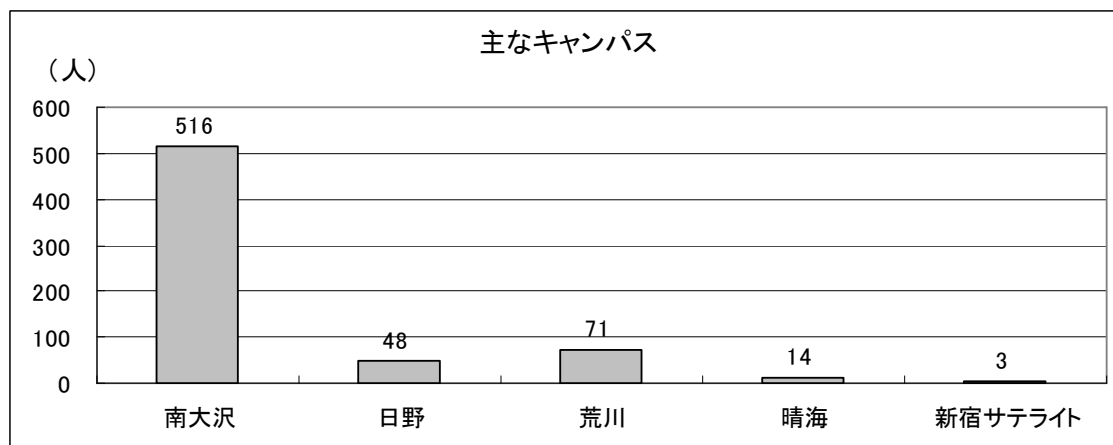
【標本構成】

まず標本構成をみると男性が 349 人、女性が 303 人であった。総数 652 人に占める性別の比率は男性 53.5%、女性 44.8%となる。本報告書では質問によってパーセントの母数が異なることがあるが、その理由は質問によって無回答の数が異なったためである。本報告書 1 の各グラフで南大沢、日野、荒川とあるのは各キャンパスを主な通学先とする学部生をさす。修士課程の学生と専門職学位課程（法科大学院）の学生は修士・専門職とし、博士課程の学生は博士として、それぞれまとめて学部生との比較を行った。本報告書 2 では

前回調査との比較のために学生食堂への評価と要望をまとめているが、こちらは立地別に、南大沢、日野、荒川、晴海に分けて比較を行っている（ただし晴海は専門職学位課程の学生のみ）。新宿サテライトキャンパス（ビジネススクール）の3名の回答者は本報告書1の修士・専門職に含まれるが、本報告書2には該当しないため現れない。また、全体を通じて過去との比較が可能な項目については過去の全体の数字をグラフに載せている。H17合計とあるのは平成17年度（前々回）の調査結果、H19合計とあるのは平成19年度（前回）の調査結果である。



回答者が21年度に主に通学したキャンパスは次の通りである。晴海キャンパスと新宿サテライトキャンパスの学生からの回答は少なかったため、この2キャンパスに関しては今回の調査結果から明確な結論を導くことは難しいといえよう。



【主な調査結果】

1 学生生活の基礎情報

- ・全体として約3割の学生が一人暮らしまたは寮生活をしている。
- ・全体として東京都に住んでいる学生が約7割を占めている。
- ・授業料負担は、約4人に3人が家族からの負担（全額負担）に頼っている。
- ・全体の約1割の学生・院生が減免・分納を現在受けている。
- ・学部生は全体として、約6割が一年中、約2割が不定期にアルバイトをしており、全くしていない学生は約2割である。大学院生になると、課程があがるにつれてアルバイトをする割合は減っている。
- ・奨学金については、約3割の学生が奨学金を現在受けている。
- ・クラブ・サークルには、全体として約6割の学生は一つ以上に加入しており、割合は増加している。

2 学生食堂への評価と要望

南大沢キャンパスでは、前回と同様に席の混雑をあげる者の割合が1位であるが、前回2位であった並ぶ時間がかかるという不満は、今回は2割以下になり大きく改善した。他の項目も混み具合を除いては、強く不満を持つ者は2割以下になっている。他キャンパスにおいてはメニューに関する要望が多くなっている。

3 キャンパス移動に伴う環境変化

進級に伴って、南大沢キャンパスから他キャンパスへと学部生が移動することの影響については、荒川キャンパス、日野キャンパスとも前回調査で8割を超えていた「学食・売店が非常に悪化した」が大幅に減り、その他の項目についても悪化とする割合が下がり、改善されてきたといえよう。

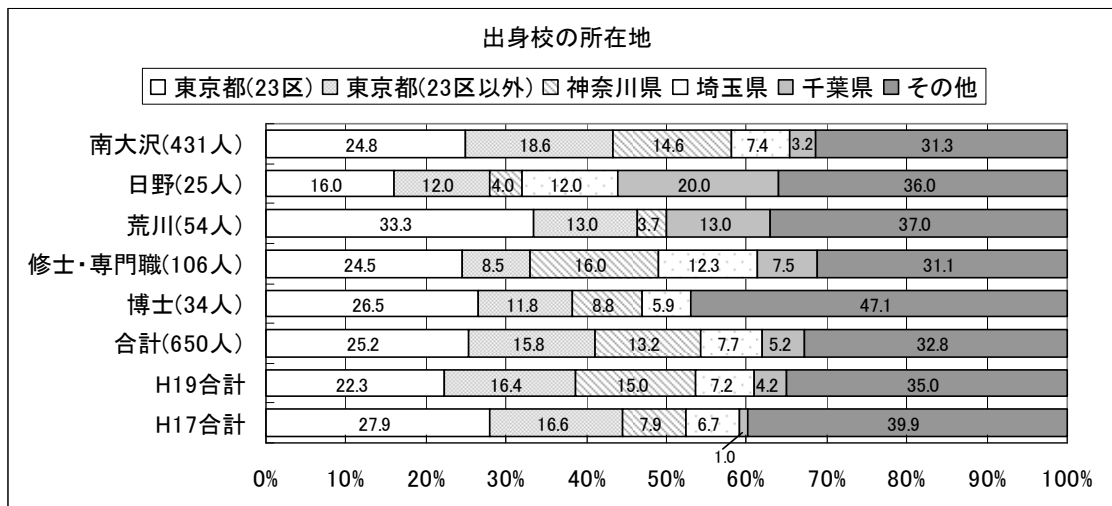
4 大学ホームページの利用状況

半数以上が自宅のPCからホームページにアクセスしているものの、利用頻度では、ほとんど見たことがないという学生が1～2割程度いるなど、情報伝達手段として十分利用されていないようである。

1 学生生活の基礎情報

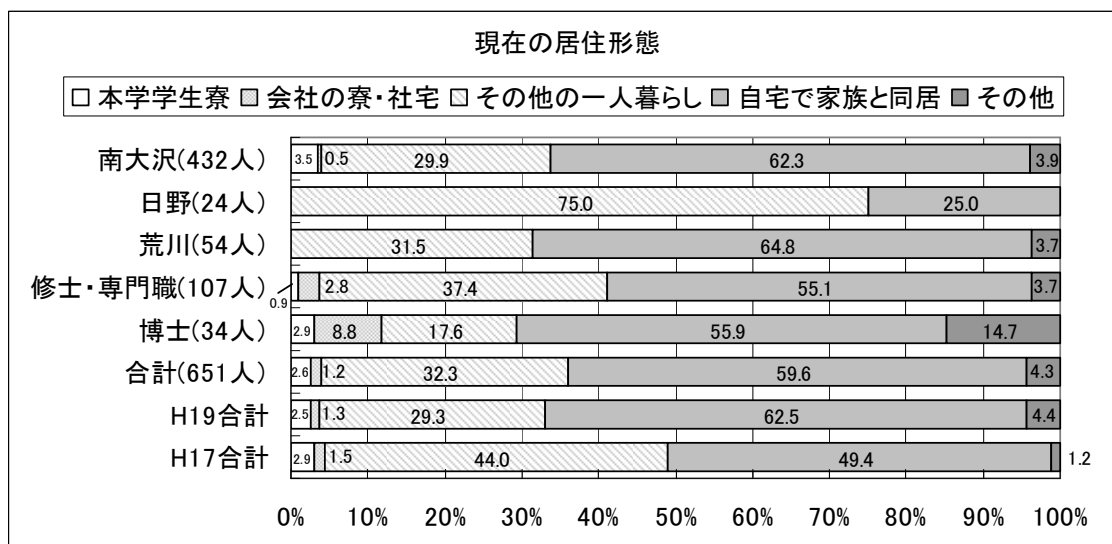
1.1 出身高校の所在地

東京都出身者が多く、1都3県で6割を超える。平成17年度にはその他の出身者が約4割いたが、現在では約3割に減少している。



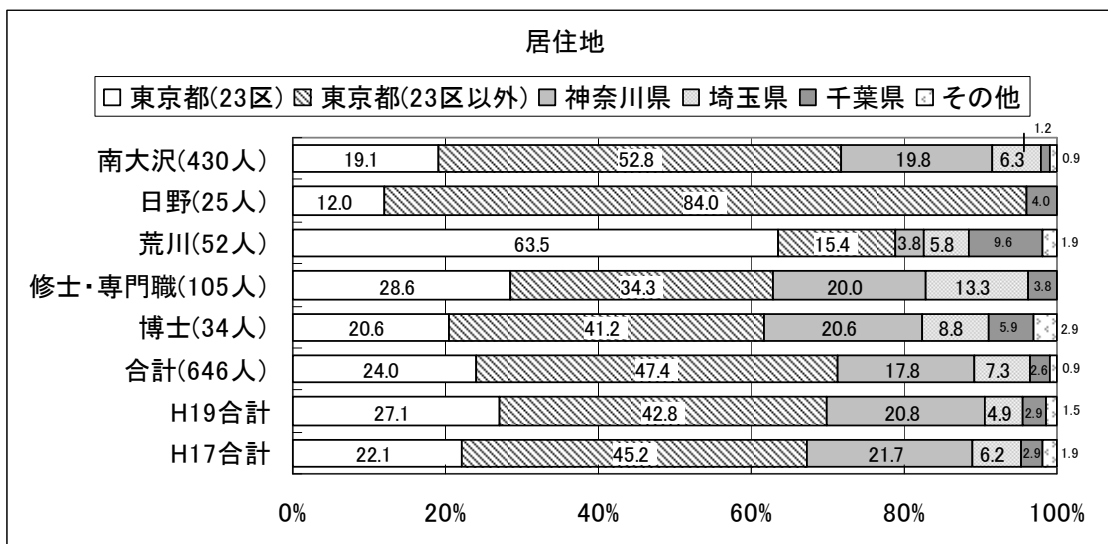
1.2 住居について

全体として約3割の学生が一人暮らしまたは寮生活をしているが、日野では7割以上が一人暮らしと回答している。因みに前回の日野（科学技術大学）では11の回答中9割が自宅で家族と同居とあり、このことはサンプル数の少なさによるものかも知れない。



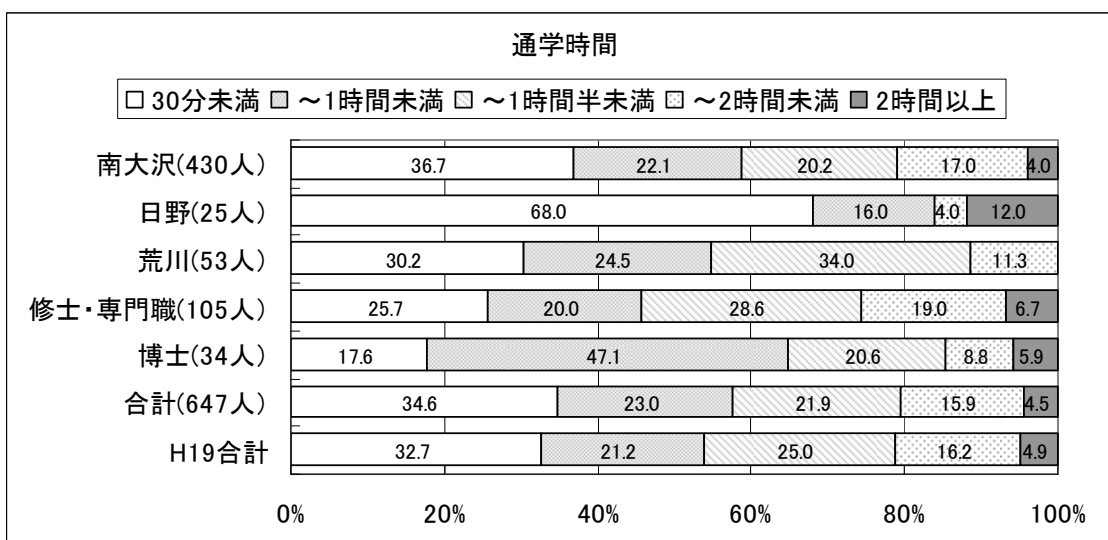
1.3 居住地について

この項目はキャンパスごとに大きく異なる。南大沢では東京都（23区以外）が最も多く約5割を占め、日野では東京都（23区以外）が約8割を、荒川では東京都（23区）が約6割を占めている。全体として東京都に住んでいる学生が約7割を占め、若干ではあるが、割合を増やしているようである。県名の記載のあったその他の居住地は、具体的には茨城県（5名）、山梨県（1名）である。



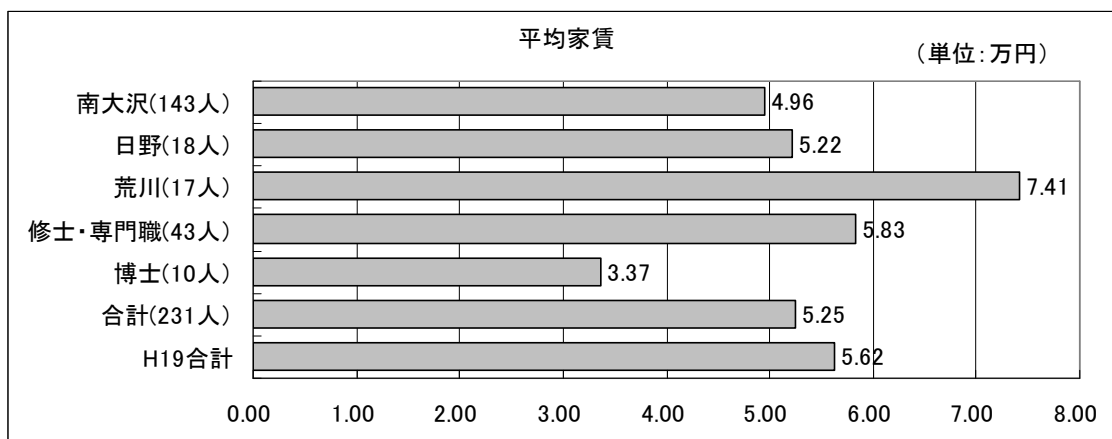
1.4 通学時間について

5割以上の学生が通学時間 1 時間未満であり、前回調査と比べても、通学時間はやや短くなっているようである。しかし通学に片道 2 時間以上かかる学生も 4.5%いる（前回調査 4.9%）。通学時間が長いことは、居住地が東京都以外であることを必ずしも意味しない。



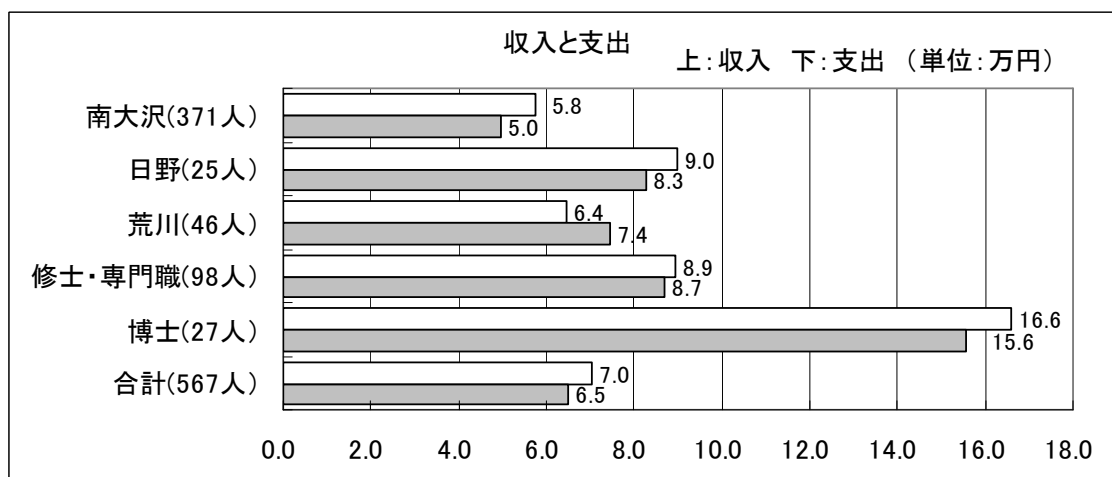
1.5 家賃について

一人暮らしあるいは寮などで暮らしている学生の平均家賃は 5.25 万円であり、前回調査 5.62 万円からみて少し下がっている。グラフにはないが、荒川キャンパス（前回保健科学大学）が他と比べて高いこと（前回調査 6.8 万円）、これに次いで修士・専門職（前回修士）が高いこと（前回調査 6.05 万円）は、前回と同様である。



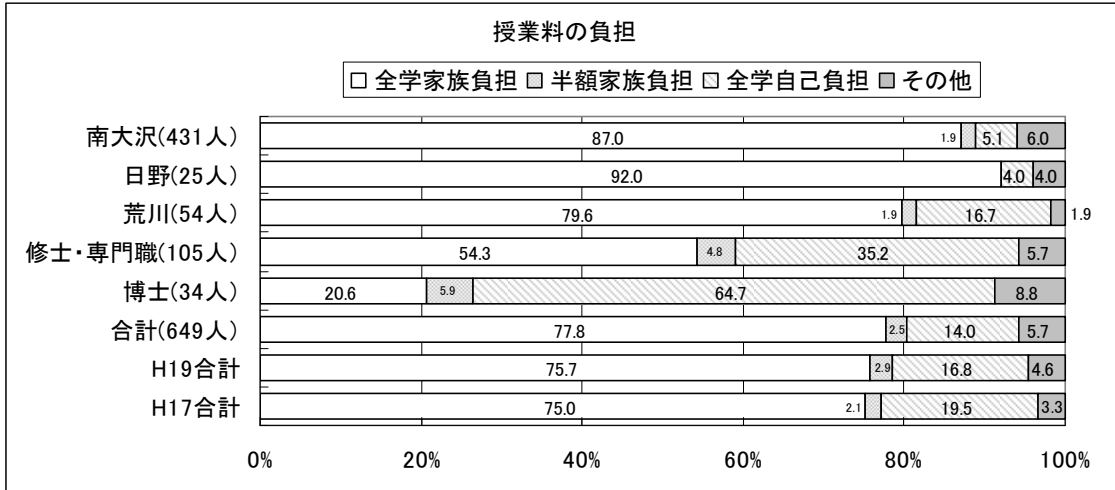
1.6 収入と支出

全体として一月あたり約 7 万円の平均収入と、約 6 万 5 千円の平均支出がある。収入・支出とも、学部生、修士・専門職、博士とあがるにつれて増える傾向がある。



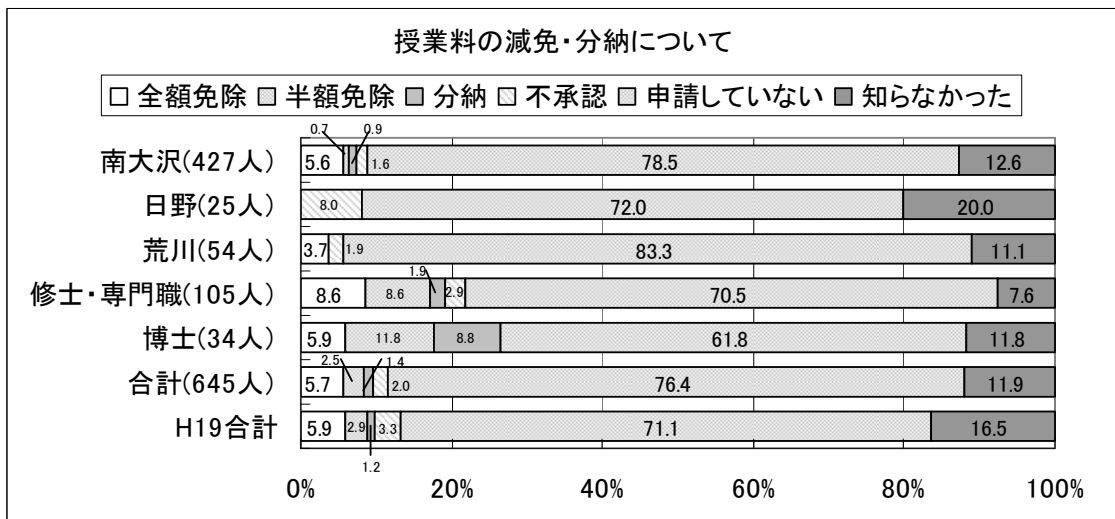
1.7 授業料の負担

前回と同じく約4人に3人が家族からの負担（全額負担）に頼っているが、大学院生になると本人が負担する比率が増える。学部生では、荒川の学生において自己負担の割合が他よりも高いようである。



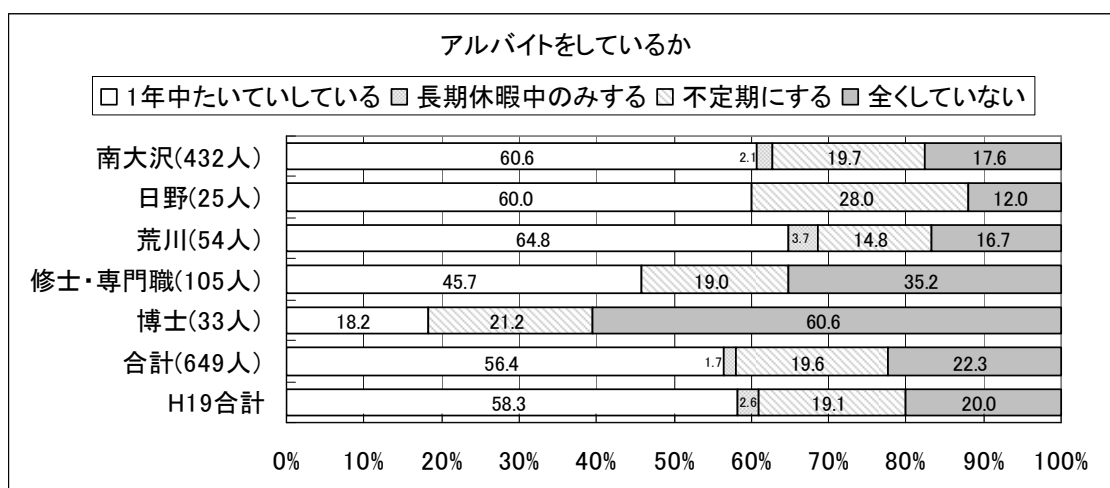
1.8 授業料の減免・分納について

全体の7割以上の学生・院生が減免・分納を申請しておらず、その割合は前回調査よりも若干増えている。しかし制度そのものを知らなかったとする学生の割合は、全体として減っている。前は南大沢の首都大生の約2割が知らなかったことが問題とされたが、今回この比率は約1割に減少している。一方で、日野（前回科学技術大学）のこの回答の比率は約1割から約2割に増えている。



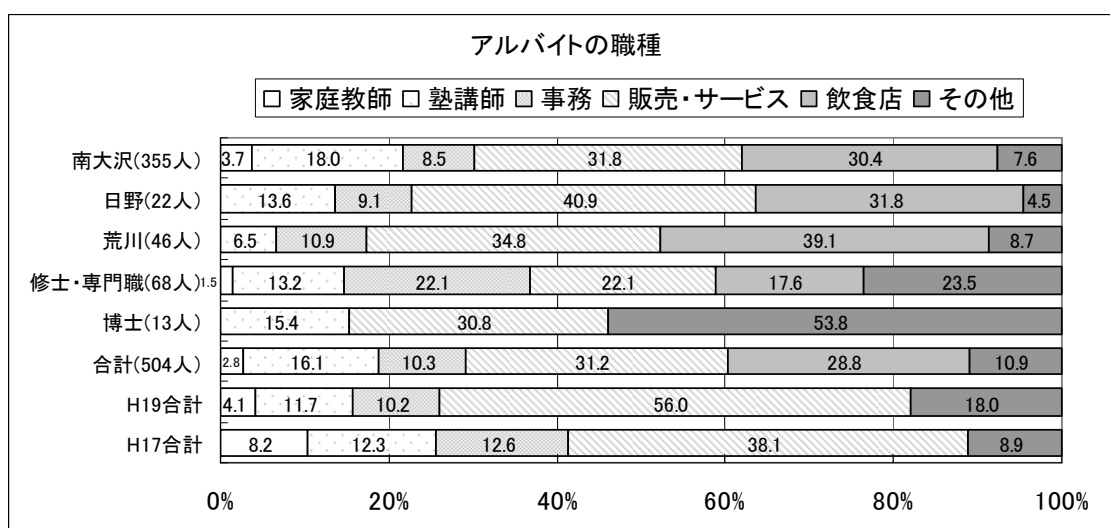
1.9 アルバイトについて

長期休暇中のみするという形態はあまりなく、学部生は全体として、約6割が一年中、約2割が不定期に、アルバイトをしており、全くしていない学生は約2割である。キャンパスごとの差は特にないようである。前回調査では荒川（保健科学大学）の学生において一年中アルバイトをしている比率が他より低いと報告されたが、今回の結果ではその差も見られない。大学院生になると、課程があがるにつれてアルバイトをする割合は減り、博士では全くしないものが過半数を占める。



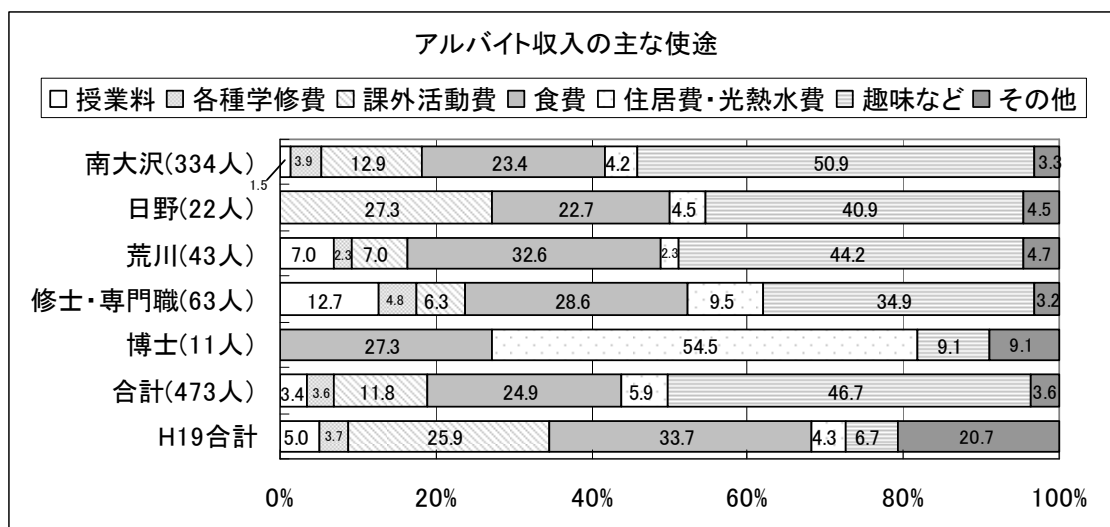
1.10 アルバイトの職種

今回、飲食店を選択肢の一つに加えたところ、学部生においていずれのキャンパスにおいても高い割合でこの回答があった。前は自由回答としてその他の中に飲食店と書かれたものもあったが、多くは販売・サービスに含まれていたものと思われる。



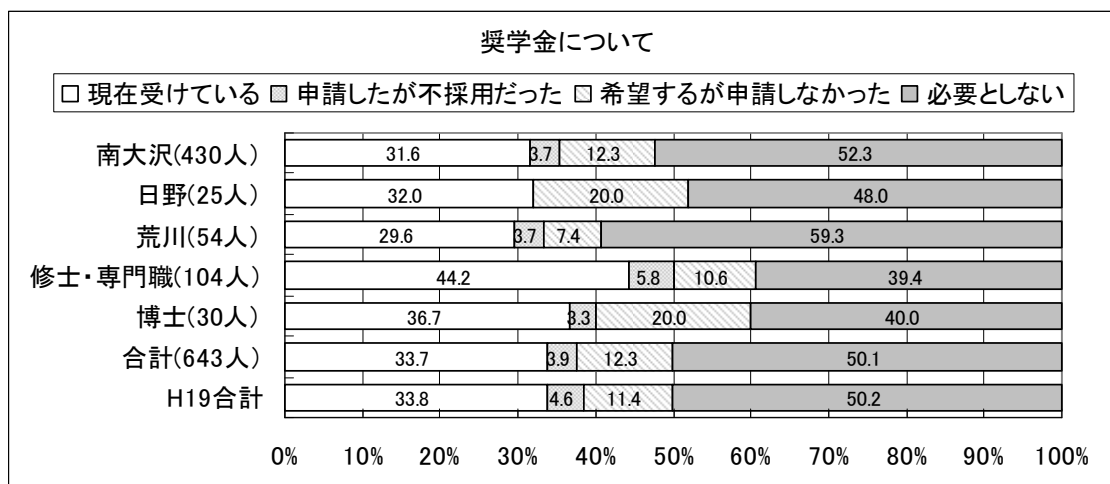
1.11 アルバイト収入の主な用途

今回の趣味という選択肢は、前回までは酒・タバコ等嗜好品という選択肢であったことに注意が必要である。しかし、その他の部分をあわせて見ても、前回に比べて趣味とその他への用途が全体的に、特に学部生において、大きく増えている。逆に言うと、授業料から住居・光熱費に至るまでの、いわば基礎的な用途への支出割合が前回に比べて低くなっているようである。博士では趣味その他への用途の割合が小さく、住居・光熱費など生活のための用途の割合が大きいこと、また授業料や各種学修費への用途は回答中ではゼロであったことが特徴的である。



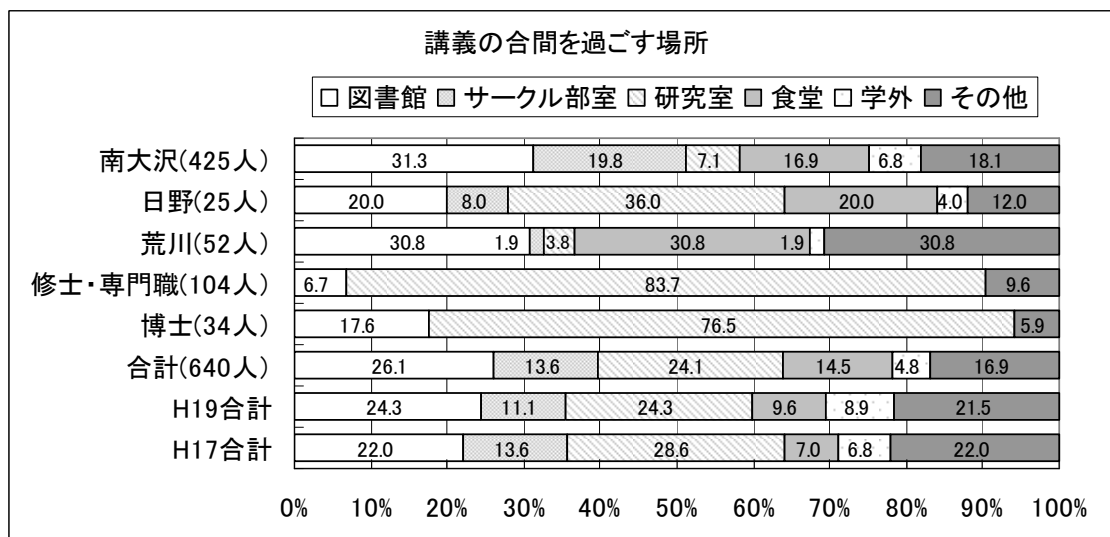
1.12 奨学金について

全体的な傾向は前回と同様で、約3割の学生が奨学金を現在受けている。前回調査では荒川（保健科学大学）の学生の受給率が約5割と、他よりも高く現れていたが、今回調査では受給率においては他と変わりがなく、必要としないと回答する割合が6割と、むしろ多いことが目立つ（前回3割）。



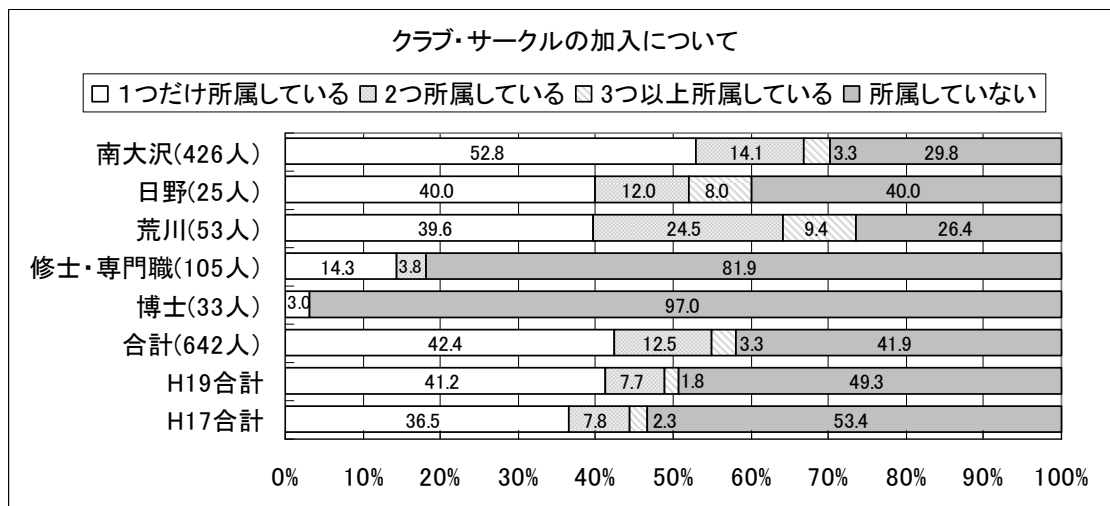
1.13 講義の合間を過ごす場所

全体としては、約四分の一が図書館、約四分の一が研究室、約四分の一がその他であった。大学院生は約8割が研究室で過ごす」と回答し、学部生でも日野では約3割が研究室をあげている。その他のうち約半数は空き教室もしくは教室と回答している。



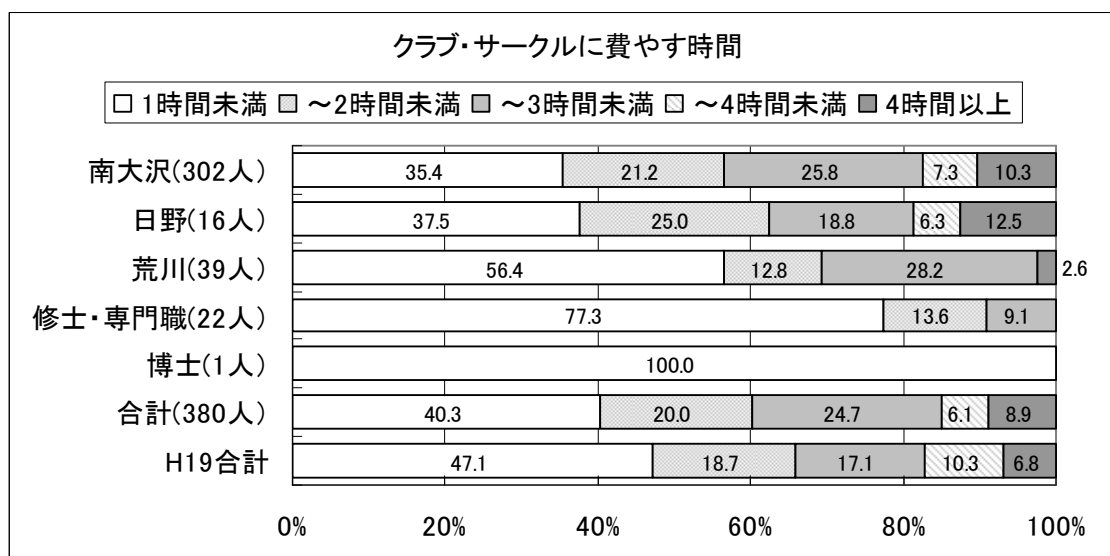
1.14 クラブ・サークルへの加入について

全体として約6割の学生がクラブ・サークルに一つ以上加入しており、過去二回の調査と比べてもその割合は増加している。学部生の加入割合をキャンパス別にみると、南大沢と荒川で約7割、日野で約6割である。荒川では二つ以上に加入する割合も高く、このことは前回調査でも見られた。大学院生の加入割合は低く、修士・専門職では2割以下、博士では0.5割以下である。



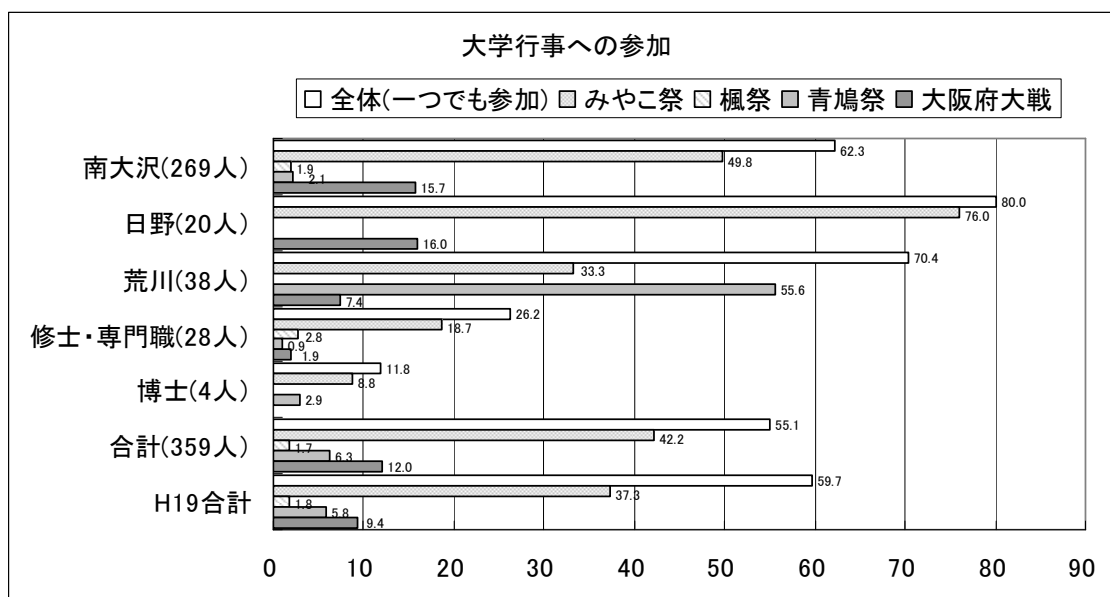
1.15 クラブ・サークルに費やす時間

クラブ・サークルに加入していると回答した学生のうち、全体の約4割が、平日1日あたりの活動時間を1時間未満としている。学部生のクラブ・サークル活動時間をキャンパス別にみると、南大沢で最も長く、加入率・加入数では高かった荒川で最も短くなっている。南大沢と日野では平日1日あたりの活動時間が4時間以上という学生も1割以上いる。



1.16 学内行事への参加状況

大学行事への参加について、行事別、キャンパス学生別にまとめるとグラフのようになる。学部生の全体（一つでも参加）は、日野約8割、南大沢約6割、荒川約7割であった。修士・専門職も約3割、博士も約1割、いずれかの行事に参加している。行事別では、みやこ祭への参加率が約4割と最も高く、大阪府大戦約1割がこれに続く。青嶋祭は荒川の5割以上が参加しているが、他からの参加はあまりない。楓祭は、いずれのキャンパスからもほとんど参加がない。

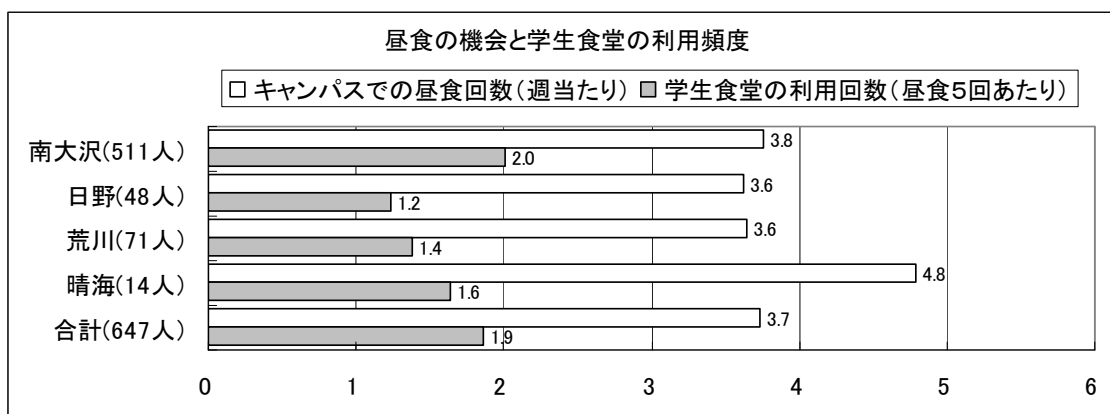


2 学生食堂への評価と要望

2.1 キャンパスでの昼食回数と学生食堂利用割合

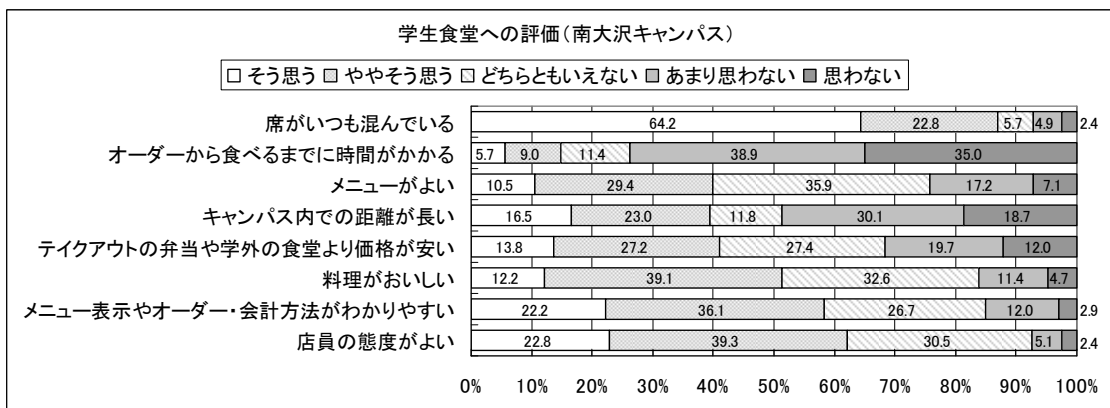
平成 17 年調査の自由回答で学生食堂への不満が多かったため、平成 19 年度調査では学生食堂への不満と要望に関する調査を実施した。今回はそのフォローの意味でほぼ同一の内容を再び聞くことにした。

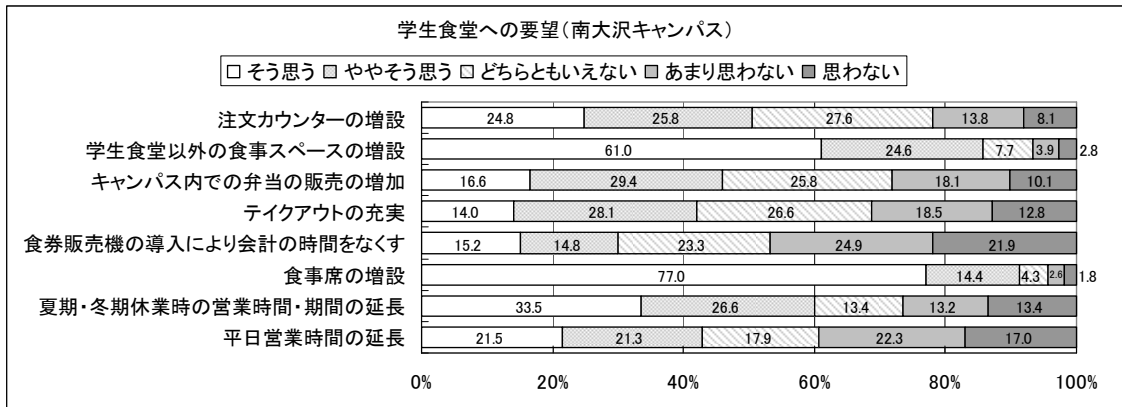
母集団の特徴として、キャンパスでの昼食をとる機会の平均をみると、いずれのキャンパスでも週あたり 4～5 回と、ほぼ毎日であることがわかる。一方昼食 5 回あたりの学食利用回数は、南大沢で 2 回、他では 1.4 回と、約三分の一から半分であることがわかる。



南大沢キャンパス学生食堂への評価と要望 (サンプル数 : 508)

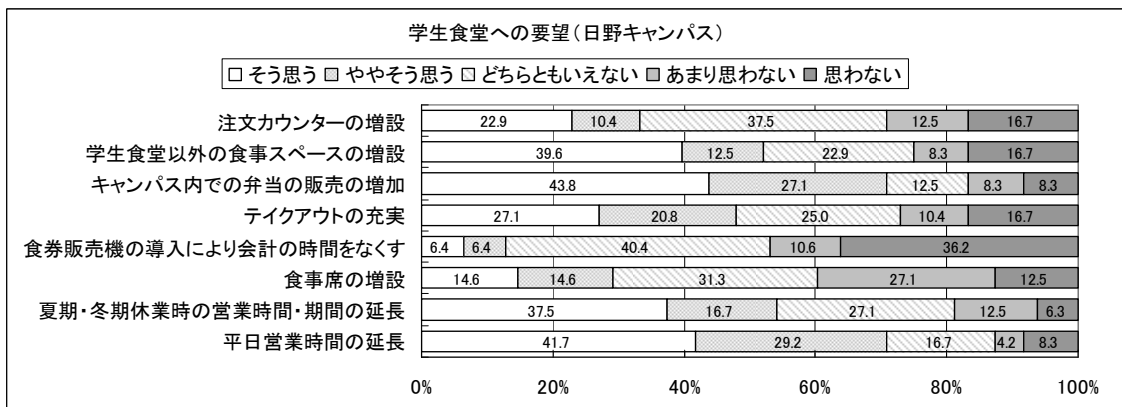
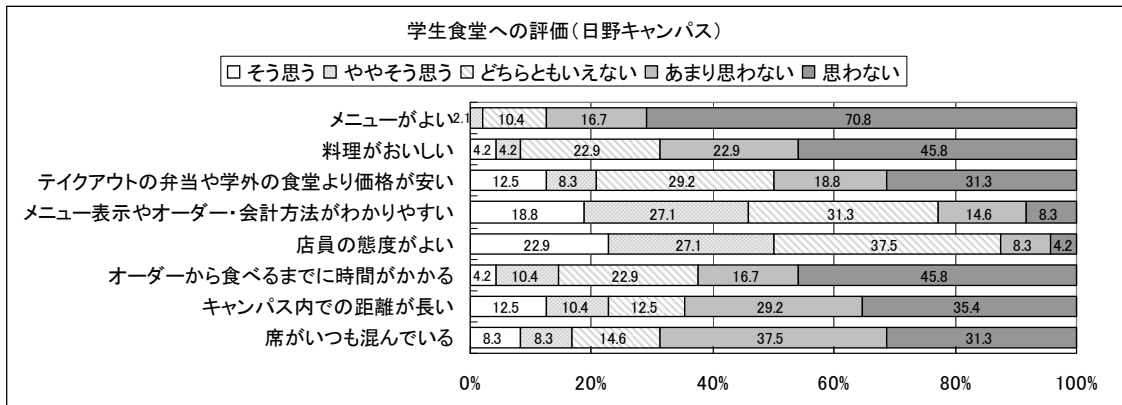
評価に関するグラフは前回調査で不満が多かった順に項目を並べている。前回と同様に南大沢キャンパスでは席の混雑をあげるものの割合が 6 割以上あり、一位であるが、前回二位であった並ぶ時間がかかるという不満は、前回調査時の約 4 割から、今回は 2 割以下に大きく改善されていることがわかる。他の項目は前回と大差なく、混み具合を除いては全体的に強く不満を持つものが 2 割以下にとどまっている。





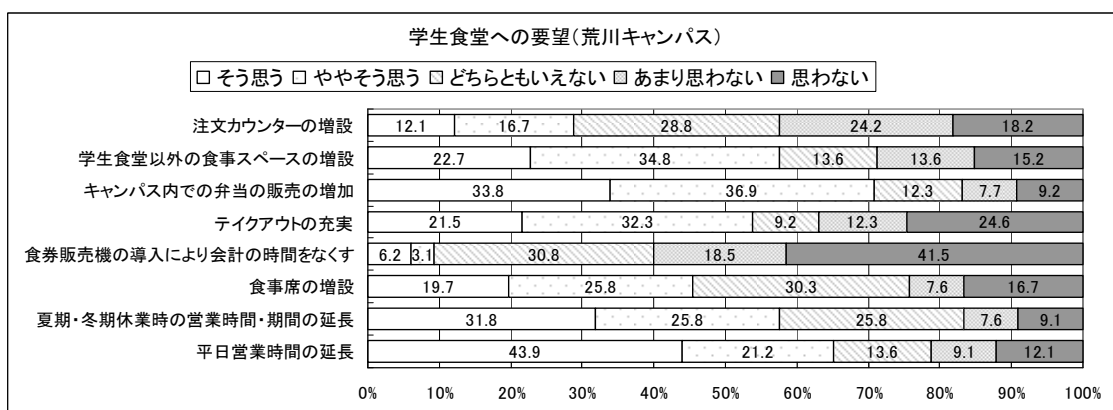
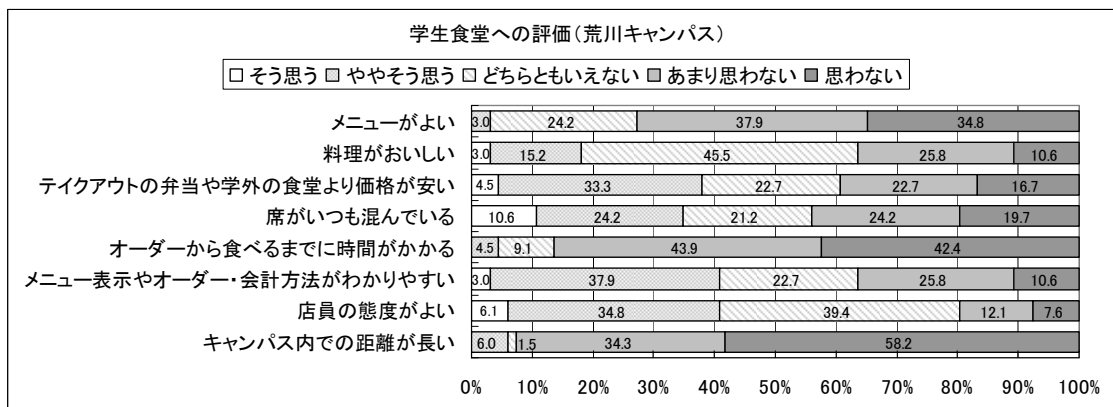
日野キャンパス学生食堂への評価と要望 (サンプル数: 48)

評価に関するグラフは前回調査で不満が多かった順に項目を並べている。前回調査と同様に日野キャンパスではメニューに関する不満が多く、前回はメニューが豊富でない(約6割)、健康的でない(約4割)、おいしくない(約4割)が上位三位を占めたが、この傾向は今回も続いているようである。一方、オーダー・会計のわかりやすさについては、若干改善されているようでもある。



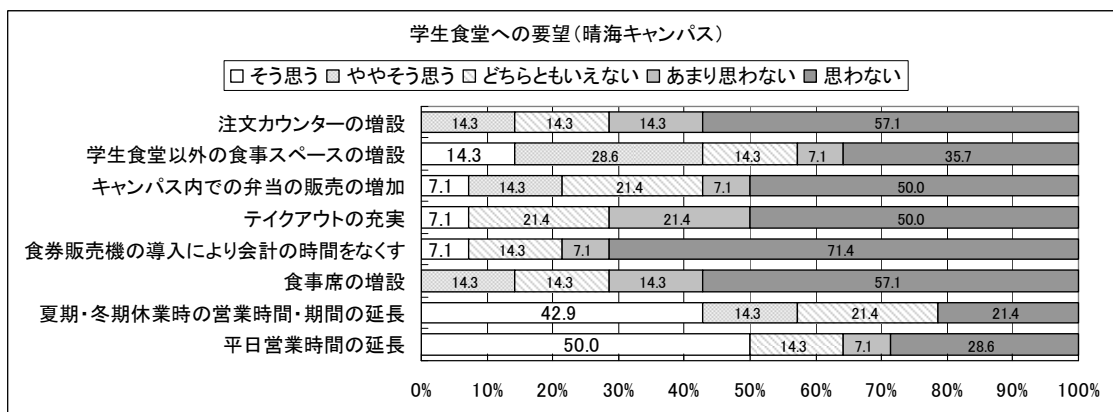
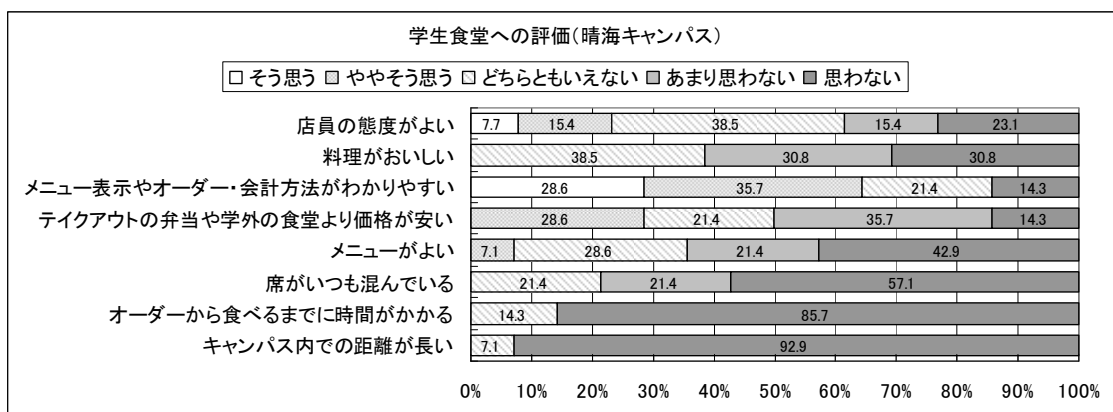
荒川キャンパス学生食堂への評価と要望（サンプル数：66）

評価に関するグラフは前回調査で不満が多かった順に項目を並べている。前回調査と同様に荒川キャンパスではメニューに関する不満が多く、前回はメニューが豊富でない（約7割）、健康的でない（約3割）が上位二位を占めたが、この傾向は今回も続いているようである。



晴海キャンパス（サンプル数：14）

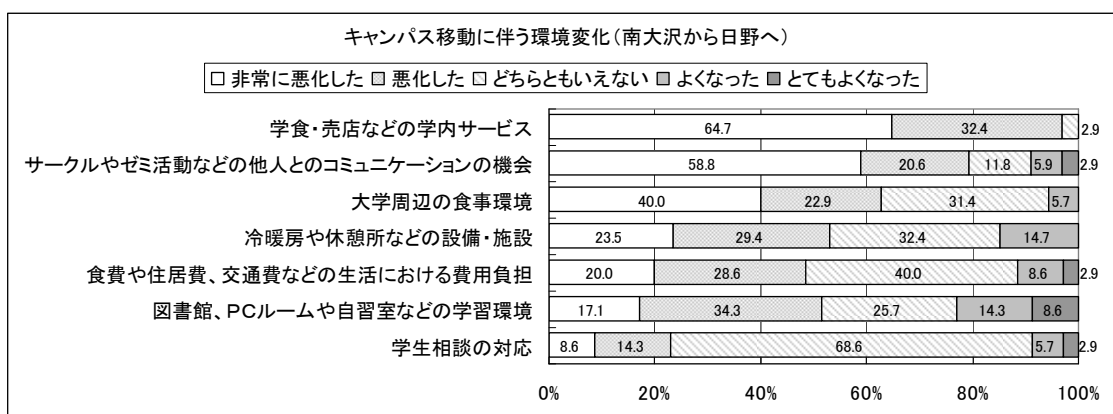
晴海キャンパスには本学の学生食堂は特になく、同居している都立高校の学生食堂を本学学生が利用している。そのため前回調査ではデータを集計していないが、参考までにグラフを載せておく。メニューのよさ、おいしさに関しては半数以上が否定的であるが、同じ建物内であるため移動距離が短いこと、また食べるまでの時間の短さに肯定的な評価が集まっている。席もそれほど混んでいないようであり、わかりやすさや価格にも約半数が評価を与えている。



3 キャンパス移動に伴う環境変化

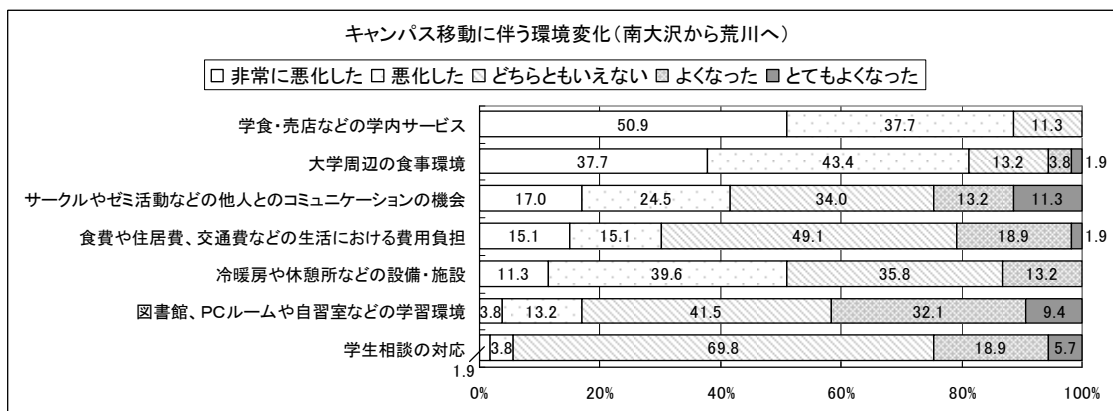
3.1 南大沢キャンパスから日野キャンパスに移ることによる環境変化(サンプル数:34)

グラフは非常に悪化の割合が多い順に並べている。前回と同様、悪化の一位は学食・売店など学内サービスの悪化であるが、非常に悪化したと考える学生の割合は前回の85%から今回65%へと減っている。前回二位であった学習環境の悪化(前回:非常に悪化60%)は大幅に改善され(今回:非常に悪化17%)、下から二番目に位置するようになった。一方、前回最下位であった施設・設備を悪化とする割合(前回4割)が今回5割となり、三位にあがってきているが、そのうちで非常に悪化とするものは、前回の35%から今回の23%へと、割合を下げている。



3.2 南大沢キャンパスから荒川キャンパスに移ることによる環境変化(サンプル数:53)

グラフは非常に悪化の割合が多い順に並べている。前回と同様、学食・売店などの学内サービスの悪化が一位であげられ、他の項目の順序もほぼ同じであるが、いずれもその割合は低下しているようである。特に、前回28%が非常に悪化とし、悪化まで含めると約5割あった学習環境の悪化については、今回非常に悪化とするものはほとんどなく、悪化までいれても2割未満であることが注目される。

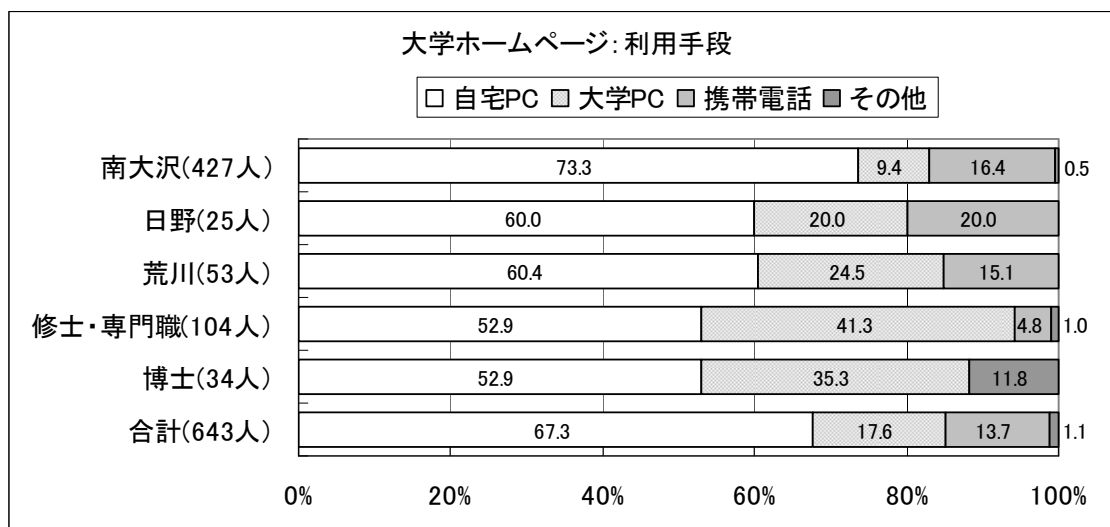


4 大学ホームページの利用状況

今回新たに大学ホームページの利用についてたずねることにした。

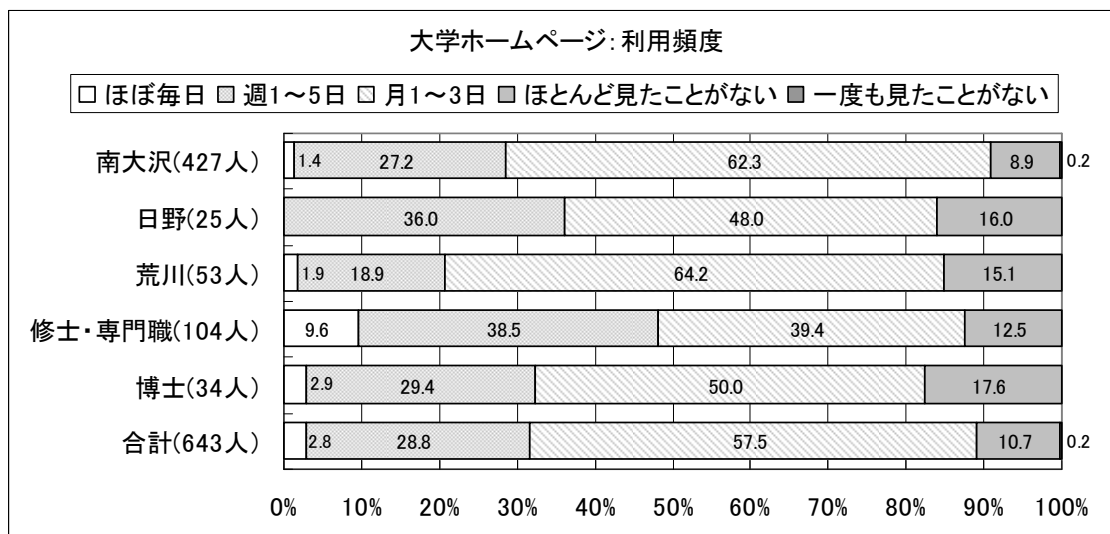
4.1 利用手段について

学部生も大学院生も半数以上が自宅のPCから大学ホームページにアクセスをしているようである（南大沢学部生は7割以上）。学部生はまた、携帯電話を利用する割合が1～2割あり、一方大学院生は大学のPCからアクセスする割合が3～4割と高い。



4.2 利用頻度について

ほぼ毎日見ている学生は修士・専門職に1割いる程度で、隔日が全体の3割程度、また、月に3回ぐらいまでが半数以上を占めている。一度も見たことがないという学生はほぼいないが、ほとんど見たことがないという学生が1～2割程度いるあたり、情報伝達手段としては不十分な使われ方しかされていないようである。



4.3 利用コンテンツについて

大学ホームページで主に利用するコンテンツを回答してもらったところ、グラフのようになった。ほとんどが、履修及び成績確認で利用しており、WEBメールの利用がこれに次ぐ。学生呼び出しはほとんど見られていないようである。

